

データが拓く、教育の未来

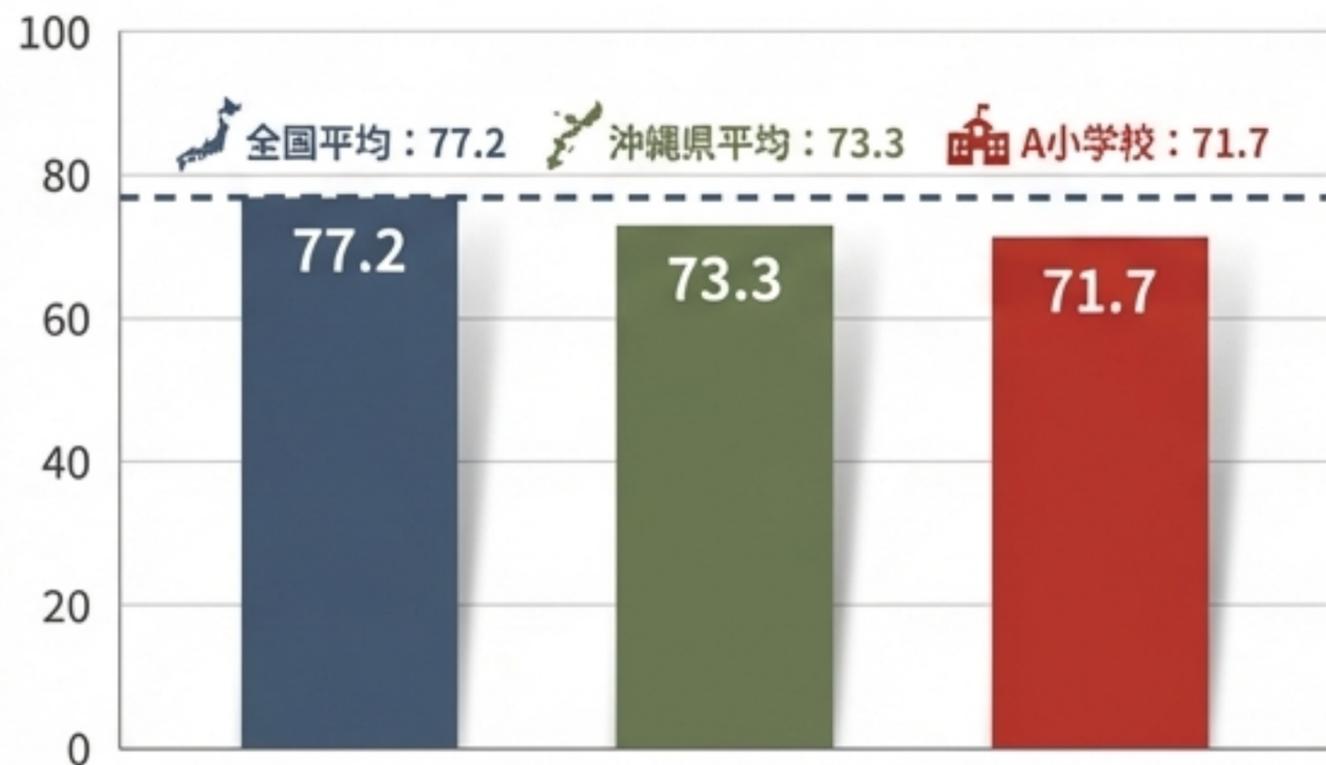
教育リソース・デジタルアーカイブが生み出す、学校変革の物語

「頑張っているのに、成果が出ない」多くの学校が直面する壁

多くの学校が抱える課題を提示。「日々の授業改善の必要性を感じているが、学力調査では成果が見えない。」これらのデータは、日本中の多くの教育者が直面する、身近で切実な課題であることを示唆します。

A小学校の初期状況

平成25年度 全国学力・学習状況調査 算数A



B小学校の初期状況

平成26年度 全国学力・学習状況調査（都道府県比較）

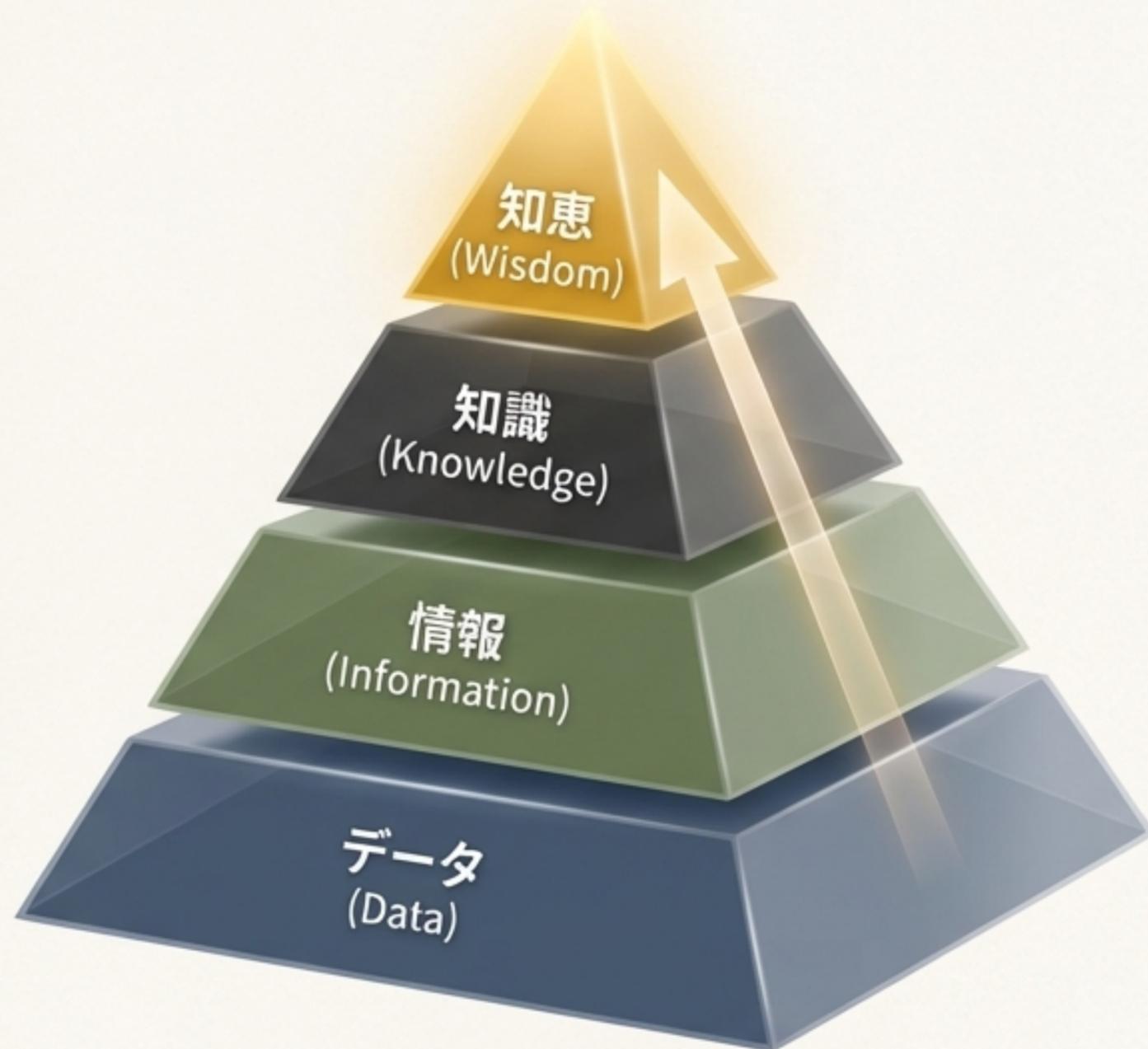


眠れる「教育リソース」を、変革の「知恵」に変える

教育リソース・デジタルアーカイブ（ERDA）
の概念を紹介します。

「学校に蓄積された数十年にわたる過去の実践記録、研究資料、教材を、現代の課題解決にどう活かすことができるのか？」という問いを投げかけます。

データ(Data)が、情報(Information)、知識(Knowledge)を経て、最終的に知恵(Wisdom)へと昇華されるプロセスを示す「DIKWモデル」を、本プレゼンテーションを貫く思考のフレームワークとして紹介します。



ケーススタディ① A小学校：沖縄県最下位からの挑戦

主人公と学校の状況

主人公として井口憲治教頭（当時）を紹介します。学校は児童数約800名の大規模校。平成25年度の全国学力調査では、沖縄県の平均点をさらに下回る全国最下位レベルでした。教師たちの危機意識は高いものの、成果が出ていませんでした。

核心的な学習課題

児童の学習課題は明確でした。「単元テストでは点数が取れるが、広範囲のテストになると定着していない」。学んだ知識の「定着」に課題があるという仮説が立てられていました。



井口 憲治 教頭

平成25年度 **算数A**

全国平均を **5.5** ポイント下回る結果

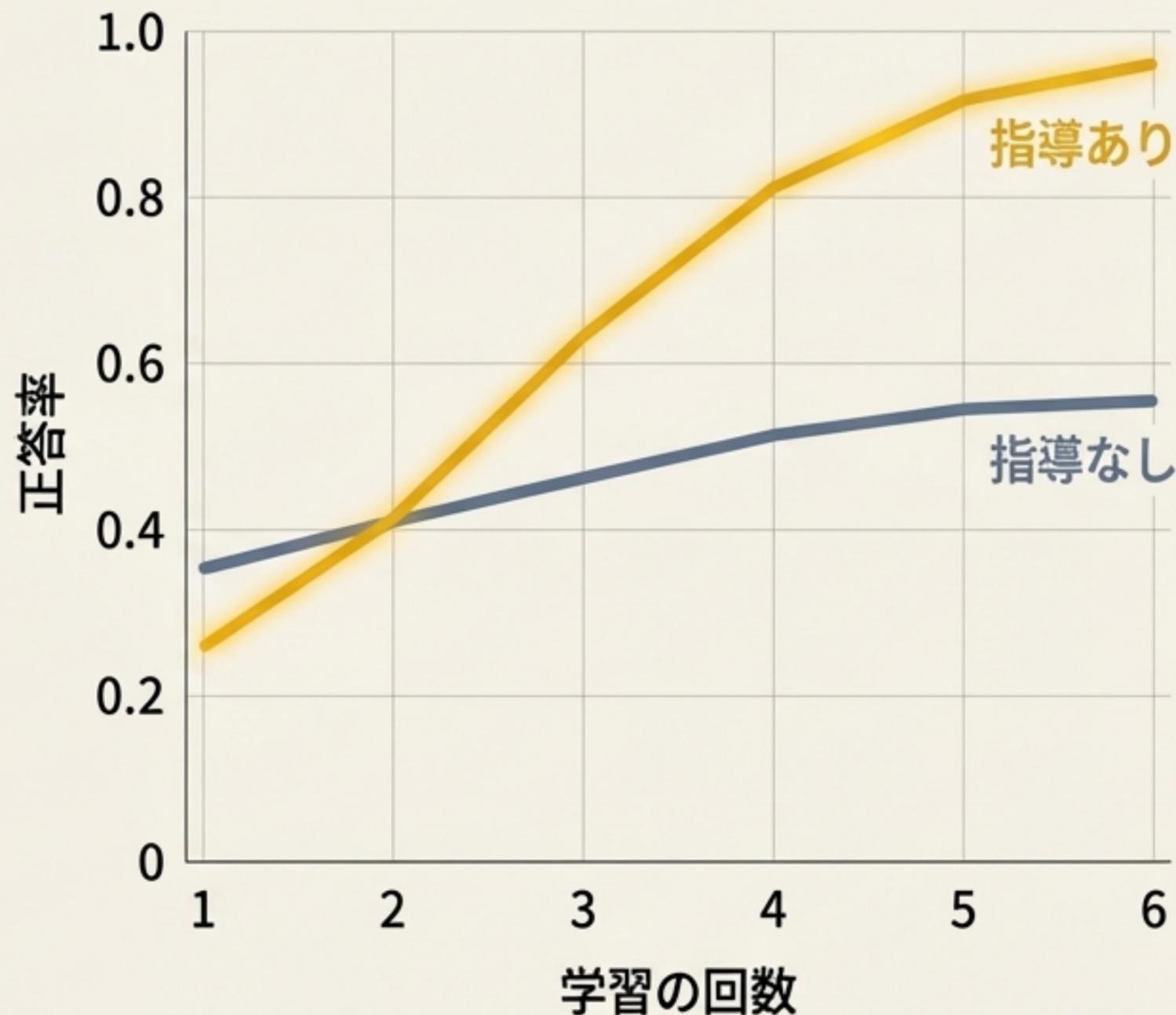
沖縄県平均を **1.6** ポイント下回る結果

アーカイブから見つけた光明：「指導の有無」が定着を分ける

井口教頭が大学院で出会い、衝撃を受けたと語る「言語の繰り返し学習」に関するデータ。これが、A小学校の取り組みの原点となりました。

- **指導なし**：繰り返し学習を6回行っても、正答率は**60%**程度で頭打ちになる。
- **指導あり**：間違いに短い指導を挟むと、4～5回で正答率が**9割**に達する。

「『ただ1回だけ解いてもう終わり』というやり方には問題がある。この視点でもう一度復習を考え直す必要がある。」 — 井口教頭



「指導ありの反復学習」を仕組み化する



① 教頭自作の復習プリント

井口教頭が全学年分の復習プリントを作成。表面は「理解を問う問題」、裏面は「計算力・家庭学習を問う問題」で構成。



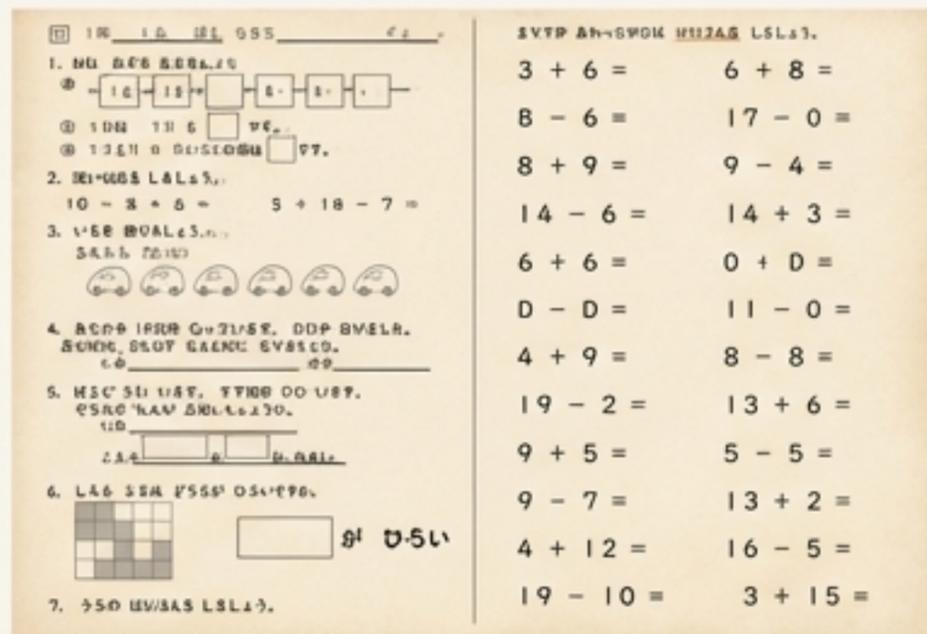
② 1日15分の復習タイム

昼休み後の15分を復習時間として設定。教師が間違いに対して個別に短い指導を行う。「個別指導は1日15分以内」とルール化し、教師の負担を軽減。



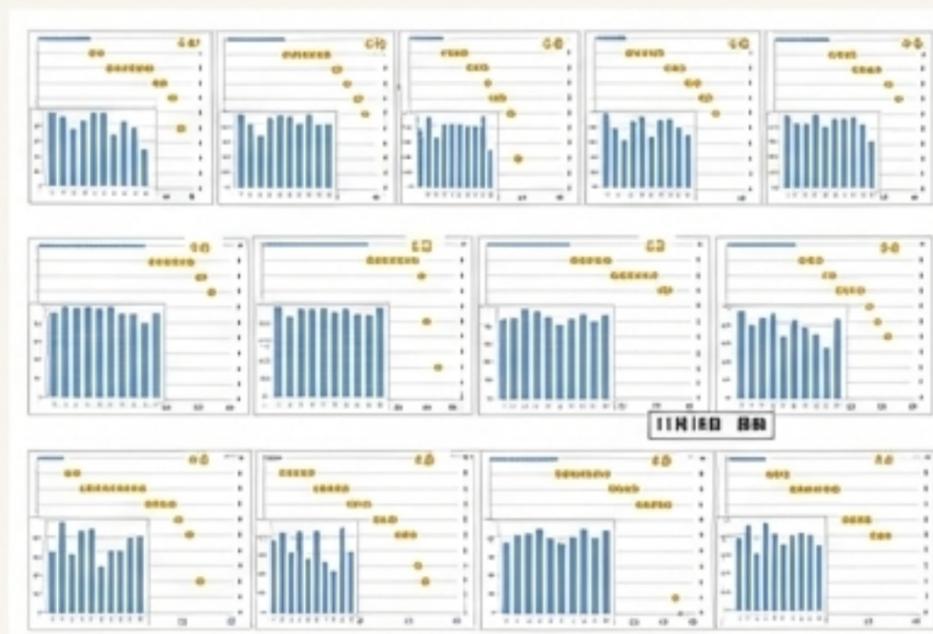
③ データによるフィードバック

教頭が採点・データ処理を行い、設問ごとの正答率や個人の得点分布をドットプロットで可視化し、各担任にフィードバック。

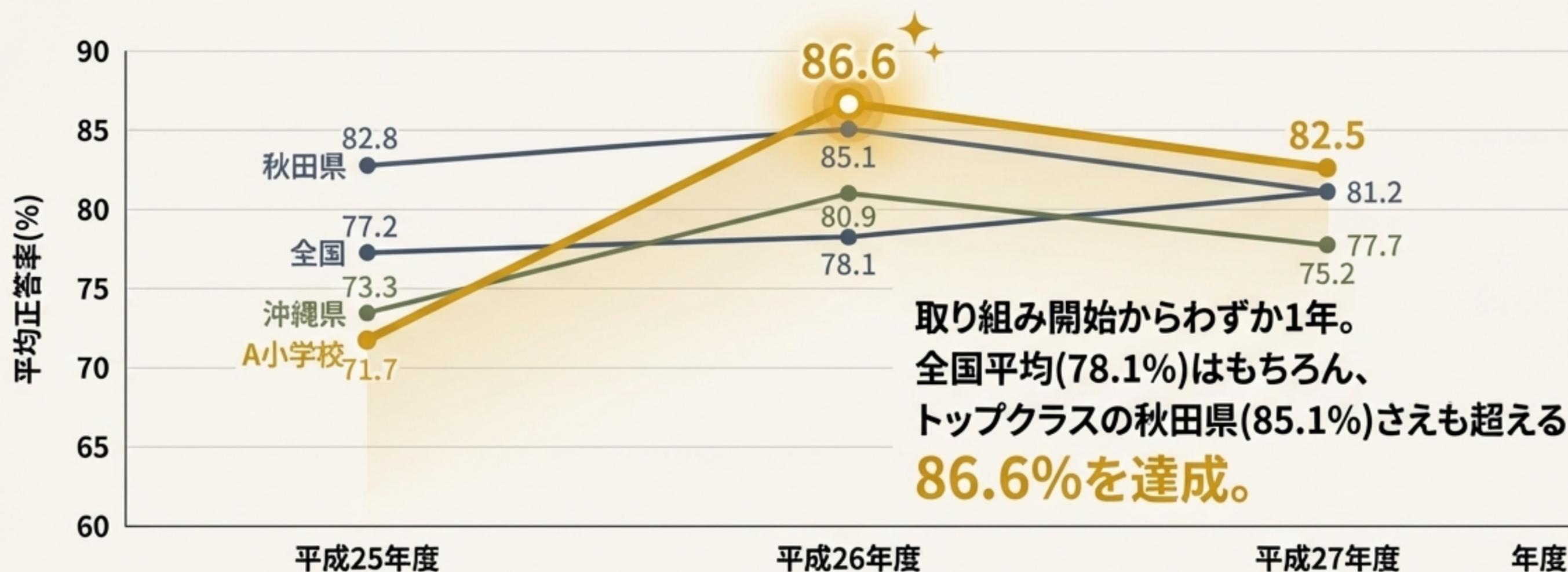


おもて

うら



成果：わずか1年で、全国トップクラスの学力へ



年度	平成25年度	平成26年度	平成27年度
全国	77.2	78.1	75.2
秋田県	82.8	85.1	81.2
沖縄県	73.3	80.9	77.7
A小学校	71.7	86.6	82.5

ケーススタディ② B小学校：困難な環境を乗り越えるリーダーシップ

主人公と学校の状況

主人公として宮城卓司教頭（当時）を紹介します。
学校は沖縄県の中でも特に厳しい環境にありました。
「家庭には全く期待できないという前提で努力してきた学校」でした。



宮城 卓司 教頭

核心的な学習課題

膨大な量のプリント学習で基礎力（算数A）は維持していましたが、応用力（B問題）が低く、児童は受け身。教師は終わらないプリントの山に疲弊し、モチベーションの低下が深刻な課題でした。

要保護・準要保護家庭

約47%

（相対的貧困率は6～7割に達する可能性）

リーダーシップの道具：理論と実践を繋ぐ「教頭だより」

宮城教頭が教師たちの意識を変えるために用いた中心的なツールが、毎週発行される「教頭だより」でした。

目的：今までのやり方を変えることへの抵抗感をなくし、授業改善の必要性について、データや理論に基づいた共通理解を形成する。

内容：

- 学力向上や学級経営に関する教育理論。
- デジタルアーカイブから選定した過去の優れた教育実践研究。
- 秋田県の学力調査結果の分析など、具体的なデータ。

この「教頭だより」を通じて、宮城教頭は毎週、全職員に向けて授業改善のビジョンと理論的根拠を発信し続けました。

No.43
2015年2月20日
宮城 卓司

教頭だより

===☆ センター研究発表会② ☆===

前回の稲田先生、阿部先生の講演の続きです。
以前の学力調査で全県の40位近くだった秋田県が、今後の調査の採点の観点でずっと位をキープしている理由として、次の点をあげていました。

※（ ）内は全県学力調査結果での全県平均と秋田県比率

- 1 熱心に授業に向かう子ども
- 2 読書し、意見交換を重視した「研究型」「課題解決型」学習
・授業で覚えると話し合う活動 (+12.9%)
・児童・生徒の読書や読書の時間を確保 (+15.5%)
・授業で自分の意見を発表する機会 (+9.2%)
- 3 授業の冒頭に「ゆめて」、最後に「振り返り」
- 4 家庭での学習習慣の定着
・家で読書の習慣 (+36.7%)
・自分で計画を立てて勉強 (+19.6%)
・家庭での学習方法を支援・生徒に指導 (+29.3%)
- 5 学校・家庭一掃のつらさ・連携
・保護者に対し、家庭学習を促す働きかけ (+14.0%)
・全県学力調査結果・地域に伝達・説明 (+15.2%)
・地域の行事に参画 (+15.3%)
- 6 質の高い授業研究システム (チームで取り組む種別で研究する)
・教員日誌掲載の月間を複数員で読出し取り組む (+10.4%)
・学校全体の学力向上や授業を全職員で共有 (+10.4%)
・家庭学習の考え方を全職員で共有 (+24.0%)

この中で特に6に関しては、研究室の授業でも「練習が足りない」ということのない開田だと詳しく説明されておりました。ご存じのように、秋田県は調査結果での授業研究が盛んな環境です。
こうして見ると、今分県連の学校に何が足りないのか、次年度はどのような活動を行えばいいのかわかってくるような気がしますが、少なくとも家庭学習の促進の共通理解や各校からの授業研究を積極的に行う必要はありそうです。

※講演の様子はこのQRコードを読み取って下さい。(1D・PW2hで入れます。)



QRコードで、優れた授業を「いつでも、どこでも」



データを元に挑戦



QRコードで授業動画を見れる

「理論がわかるだけでは、授業は改善できない」という課題に対し、宮城教頭はQRコードを導入。教師はスマートフォンで読み込むだけで、解説されている理論が実践されている優れた授業の動画（100時間以上のアーカイブから選定）を視聴できました。これにより、抽象的な理論と具体的な実践が結びつき、理論を「知っている」から「できる」への移行を強力にサポートしました。

成果：学力向上と、主体的に学び合う文化の醸成

驚異的な学力向上

1年間の授業改善の結果、全国トップレベルの成績を達成

年度	理科	算数A	算数B	国語B	総合
平成26年度 B小学校	48位	25位	48位	43位	48位
平成27年度 B小学校	1位	3位	4位	4位	4位

文化の変革



生徒：「子どもたち同士をつなぎ、みんなで一緒に努力する」文化が醸成され、主体的に学び合うように。



教師：プリントの山から解放され、授業改善について話し合うようになり、精神的な負担が軽減。

学力向上だけではない、**学びを豊かにするアーカイブ活用**

デジタルアーカイブの活用は、テスト対策に留まりません。沖縄の修学旅行用デジタルアーカイブ「沖縄おうらい」は、観光情報に歴史的背景やオーラルヒストリー（証言映像）を組み合わせ、学びを質的に深化させる事例です。

Oral History ④

『沖縄エイサーの歴史』
オーラルヒストリー
宜保寛治郎氏



Actives
ウェブサイトへ

エイサーの踊りの背景にある文化や人々の想い、首里城の復元に向けた情熱など、断片的な知識ではなく、文脈を持った豊かな物語として沖縄を学ぶことができます。

エイサーの踊りの背景にある文化や人々の想い、首里城の復元に向けた情熱など、断片的な知識ではなく、文脈を持った豊かな物語として沖縄を学ぶことができます。



エイサーの踊りの背景にある文化や人々の想い、首里城の復元に向けた情熱など、断片的な知識ではなく、文脈を持った豊かな物語として沖縄を学ぶことができます。



エイサーの踊りの背景にある文化や人々の想い、首里城の復元に向けた情熱など、断片的な知識ではなく、文脈を持った豊かな物語として沖縄を学ぶことができます。

Lectures ①

講演「首里城の復元と沖縄の文化」
高良會吉氏（琉球大学）



Archives
ウェブサイトへ

首里城の復元と沖縄の文化について、高良先生が詳しく解説します。首里城の歴史や、沖縄の文化の背景について、断片的な知識ではなく、文脈を持った豊かな物語として沖縄を学ぶことができます。

首里城の復元と沖縄の文化について、高良先生が詳しく解説します。首里城の歴史や、沖縄の文化の背景について、断片的な知識ではなく、文脈を持った豊かな物語として沖縄を学ぶことができます。

成功を支える共通の柱



1. リーダーシップとビジョン

変革を主導する教頭の存在。**明確なビジョン**と、それを実現するための**情熱と戦略**がありました。

(例：井口教頭、宮城教頭)



2. データに基づいた実践

アーカイブのデータや理論を意思決定の根拠とし、勘や経験だけに頼らない指導を徹底しました。



3. 仕組みによる支援

多忙な教師を支える具体的なツール（復習プリント、教頭だより）と時間を提供し、実践を継続可能なものにしました。



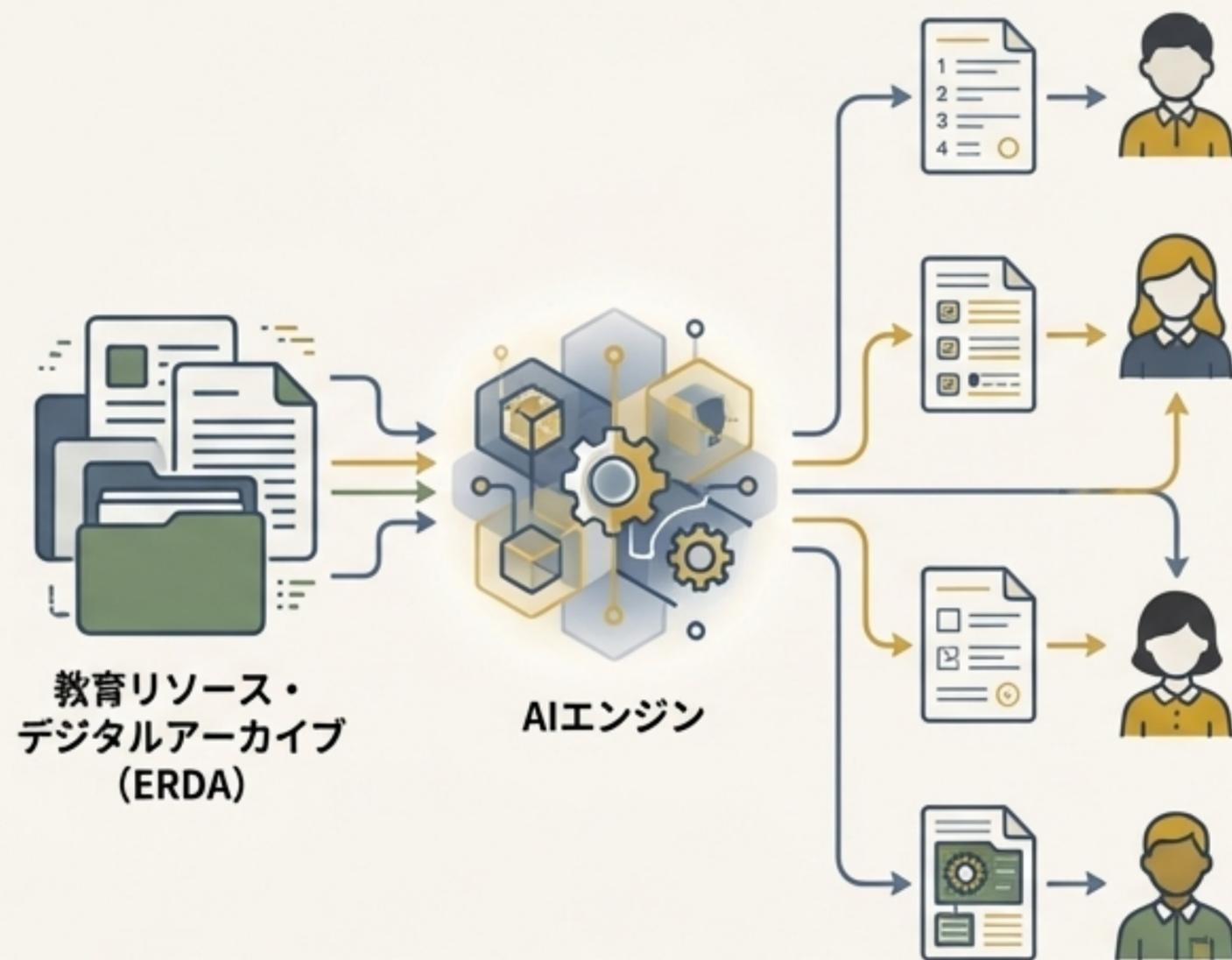
4. 文化の醸成

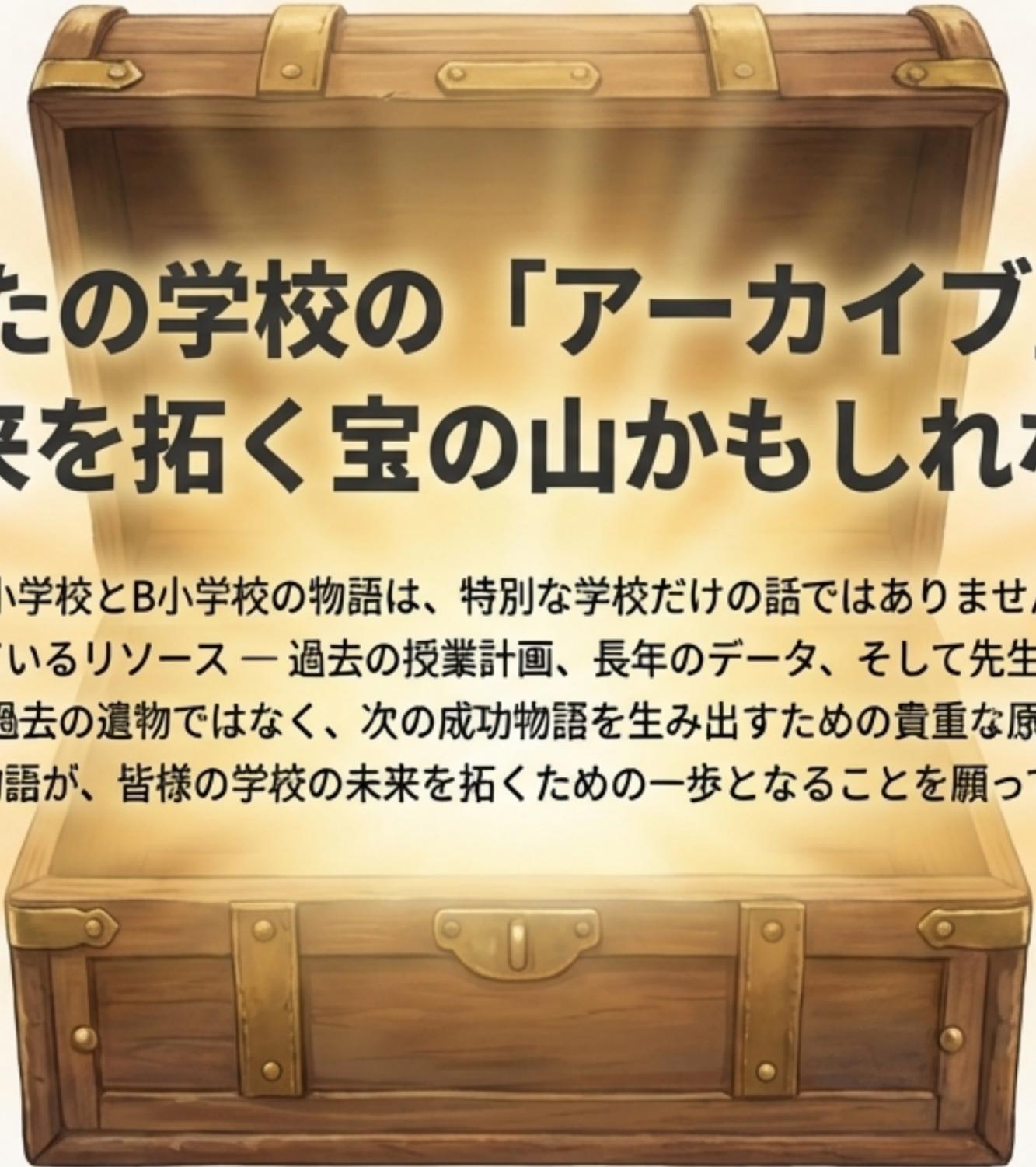
学力向上を、個人の努力だけでなく、生徒同士、教師同士が協働し、学び合う、学校文化の創造と結びつけました。

AI時代における、教育リソースの新たな可能性

A小学校の事例では、**井口教頭**が児童の習熟度に応じて課題を**手作業**で作成していました。これは大きな努力を要します。

今後の展望：**教育リソース・デジタルアーカイブ**と**AI（特に生成AI）**を組み合わせることで、このプロセスを**自動化**できる可能性があります。AIが学習履歴を分析し、アーカイブ内の膨大な教材から、個々の児童に**最適化された学習プリント**やデジタル教材を**自動**成ます。これにより、教育の質をさらに向上させると同時に、**教師の負担を大幅に軽減**することが期待されます。





あなたの学校の「アーカイブ」は、 未来を拓く宝の山かもしれない

A小学校とB小学校の物語は、特別な学校だけの話ではありません。

あなたの学校に眠っているリソース — 過去の授業計画、長年のデータ、そして先生方自身の経験と知恵 — それらは過去の遺物ではなく、次の成功物語を生み出すための貴重な原材料です。
今日の物語が、皆様の学校の未来を拓くための一歩となることを願っています。